

東
京
TOKYO

双松会報

第10号
特別
編集号

会長挨拶

第64回 総会報告

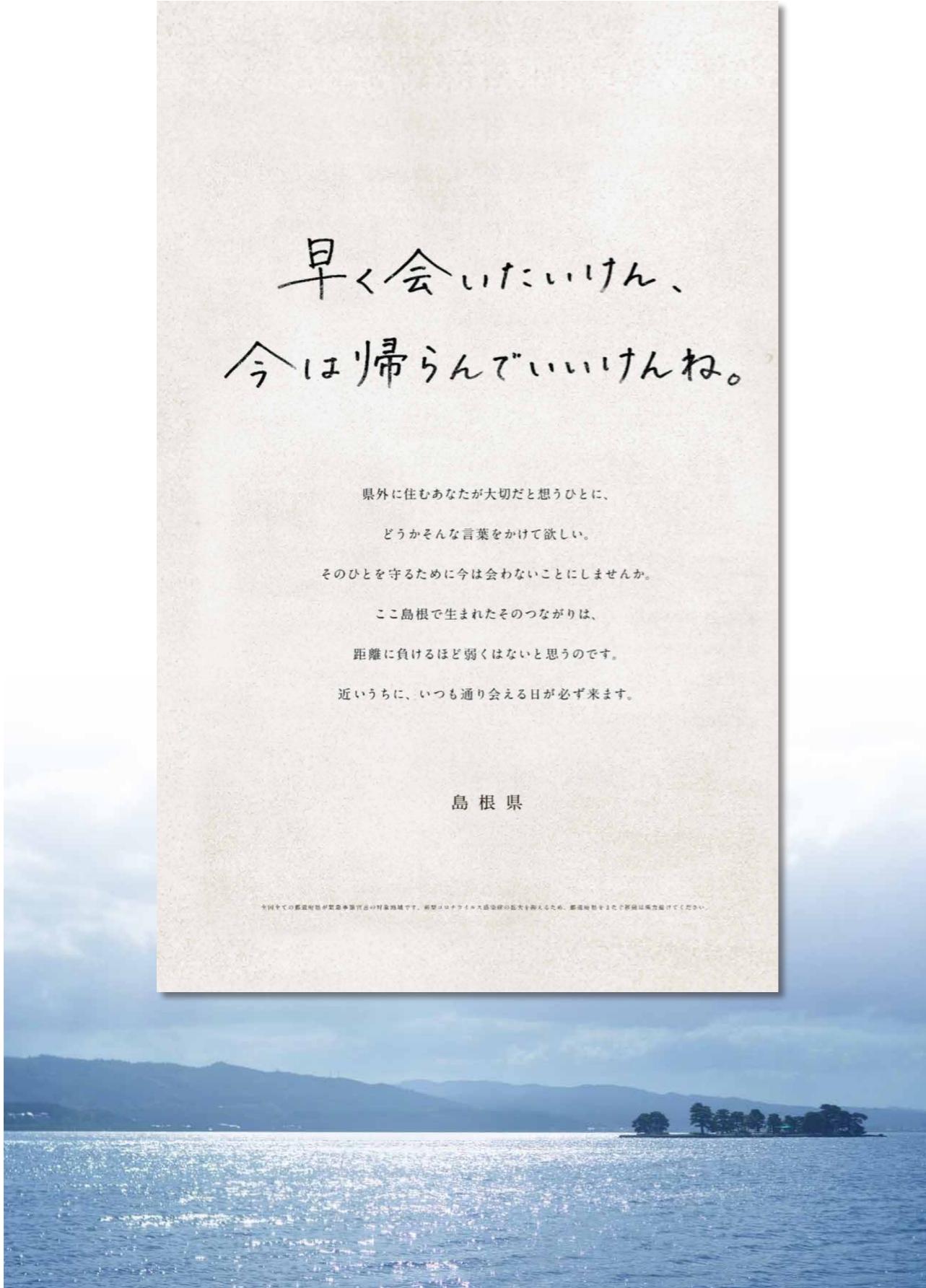
活動報告 ゴルフコンペ・忘年会・新年会

特別寄稿

リレーメッセージ

来年の総会案内





会長挨拶

会長 井原 勝美（北高20期・昭和44年卒）

東京双松会の会員の皆様、ご無沙汰しております。本格的な春の訪問が待ち遠しいこの頃ですが、お元気でお過ごしのことと存じます。連日メディアではまだ新型コロナ陽性者の話題で溢れていますが、会員の方、そのご家族、ご親戚に万一感染された方がいらっしゃる方には、一日も早い回復をお祈りいたします。

例年開催される秋の総会は、残念ながら2020年は取りやめとなりました。年一回のこの会を楽しみにされている方が沢山いらっしゃるので、事務局では何とか開催する方法はないか最後まで検討していただきましたが、現下の状況下止むを得ない、しかし適切な判断だったのではないかと思います。

会員の皆様と直に触れ合う機会は減りましたが、反面当双松会のHPが充実し、会員のリレーエッセイが相当蓄積しております。まだお読みになっていない方がおられましたら是非<https://tkssho.qwc.jp>を訪れて下さい。会員の近況、活躍ぶりの一端に触れられ、双松会を通じての絆を感じさせてくれます。

withコロナの生活は一方で日本の社会が抱える不都合な現実を浮き彫りにしました。その解決の為、急速な社会生活の変化が生じています。とりわけ、行政、医療、教育、ならびに会社での働き方が大きく変わろうとしています。現役の会社員の方や学生の会員の方は大きな環境の変化に見舞われておられることでしょう。また、飲食業に関わる仕事をされている会員の方は事業継続に大変苦労されていることと思います。早くこのコロナ禍が鎮静化に向かい、平穏な生活に戻ることを祈らずにはいられません。

米国では大統領選で遂に民主党が勝利を収め、新しい大統領が誕生しました。日本でも新しい菅政権が発足しました。過去の政権と大きく異なる政策を進めようとする米国と、前政権の継承を唱える日本では政治の方向性に大きな違いはありますが、安定した日米関係の再構築と発展を期待したいと思います。今年は東京オリンピックが開催される年でもあります。まだ予断を許さない状況ですが、願わくはオリンピックが終了した後に、また皆様と、今度はrealに再開できることを切に期待しております。

Stay safe, stay healthy !

第64回総会報告

第64回総会 参加者100名

品川プリンスホテル バンケットタワーにて開催致しました。
盛会にご協力頂きました事、事務局一同感謝申し上げます。



品川プリンスホテル

第64回総会 井原勝美会長挨拶

皆さんこんにちは。今日は約100名の参加者で、年次別テーブルで若い方もいらっしゃいますので、ぜひ世代を超えて交流されたら良いと思います。松江から4名、近畿双松会会長さんもお出で頂き5名の来賓を迎えております。また、改めて紹介ですが、前回の総会で毛利さんが本会副会長に就任されました。毛利さんは北高昭和51年卒業後東大に進まれ、国土交通省トップである事務次官に就任。昨年退任されました。毛利さんと同期の方が文芸春秋に紹介され、ご覧になった方もいらっしゃると思いますが、記事を読んでいぶん優秀な方が多いという感想でした。

さて、現在、縁あって教育関係の会社に携わり、昨今の教育に関する課題について色々議論する機会を得ています。今、小中高の受験の内容が大きく変わろうとしているので、この場を借りて、そこで議論した内容の一端をみなさんとシェアしたいと思います。お断りしておきますが、私は教育の専門家でもなく、内容についてそう深く理解しているわけでもないので、若干表層的な話にとどまるかと思いますが、今話題になっている課題のキーワードくらいはお話をできたら良いと思っています。

まず1つ目、大学入試が変わろうとしています。これは連日マスコミに取り上げられ、新聞紙上でご覧になられているかと思いますが、2020年からその様相がやや変わってきます。一つは大学共通入試テストというのが導入され、その試験に記述試験が導入されることです。現在、全国に大学は約800校近くあり、驚くことにその過半数の大学が選択問題だけで、文章を書かずして入試の合否が決まるという実態があるようです。そうなると表現力がまったく磨かれないと、それを修正する意図です。わずかなことですが、国語と数学の一部に、記述試験が導入されるということです。これについてマスコミから強い反対もあり、例えば、採点の公平性はどう担保するのか、という話があります。と言うのも、ある一定期間で全受験生の採点をしなくてはならず、学生アルバイト

を使った採点体制を取らざるをえない状況となり、その状況で公平性が担保されるのか、という心配を投げかけられています。これはどうしても乗り越えなければならない課題ではないかと思います。次に、もう一つ変わるのが、英語の4技能試験。それも民間試験を活用する方向です。今まで英語の試験というリーディングとピアリングを非常に重視していましたが、それに加え、書くことと話すこと、この四つの技能をはかる民間試験を導入しようと言うのが変化点です。私も経験しましたが、大学までは一応英語はちゃんと取ったつもりですが、実社会に出て実際に外人と話す機会では、何を言っているかさっぱりわからない、言いたいこともしゃべれない、という状況でした。それではやはり困るので、この四技能になるべく早い段階から習得しようという教育方針に変わることです。これについても非常に反対意見が強く、マスコミでも大きく取り上げられています。実際この四技能の試験会場を全国に何か所作るか、必要となる試験官の確保、民間試験の実施主体が明確でない状況もあります。また、それに対し高校の校長先生をはじめとして大きな反対意見があり、時期が早すぎるのではないか、もう一回考え直したらどうだという様な話になっています。

大学側もこの試験の方法をどう活用するか、ばらばらです。ある大学は積極的に活用する、またある大学はまったく参考にしないという状況があり、今その賛否両論が飛び交う状況です。文科省は現在のところ、これについてのスタンスを変えておらず、是非実施したいという状況です。これは今後どうなるかちょっと油断を許さないと思います。

2つ目は、「S T E M教育」。S T E MというのはサイエンスのS、テクノロジーのT、エンジニアリングのEと数学のMですね。嫌だなあと思われる方もいらっしゃるかもしれません、この4つに専門性を持つ人材をもっと輩出しなければならないという問題意識です。確かに今民間企業の間ではいわゆるAIとかデータサイエンスとい

われるような領域の人材が圧倒的に不足しており、企業の中でそういう領域ができる人材の再教育を多くの企業が手掛けている状況だと思います。遅まきながら教育界もそれに対応するプログラムを用意しなければならないという問題意識が出ており、再来年から小学校でいよいよプログラミング教育が必須となり、中学・高校でもプログラミング教育のみならずいわゆるインターネットを含めた情報に関して、もう少し知見を深める教育プログラムを整備するという状況になっています。中国やインド、アメリカにくらべると圧倒的にAIやデータ解析する人が供給不足で、私はこういった領域で日本の産業の競争力は将来的に大丈夫なのか、という懸念を持っています。やや手遅れ感はありますが、やっとそういった動きがこれからはじまるという状況です。

3つ目は、リカレント教育。これは我々の世代は学校を卒業して一つの企業に就職すると一生そこで勤めるのが常識的なキャリアでした。人生百年時代で、副業や転職、あるいは定年後の就職機会に非常に関心が高まっています。それに呼応する形で、誰でもいつでも再教育を受けられる教育環境を整備していくということです。つまり「就学と就労を何度も反復できる社会にしていくべきである」という考え方があり、望めばいつでも再教育を受けられるという環境を提供していくという動きがあります。もちろんそれを受け止めるのは第一次的には大学ですが、我々は大学でのそういうプログラムはちょっとハードルが高いので、2つ紹介します。私の実体験も含めて「Coursera」と「Udemy」という機関がウェブを使った教育プログラムを提供しています。それ以外にも沢山ありますが、これは非常に使い勝手のいい、かなり効率的、効果的なWEBで、是非覗いてみられることをお勧めします。「Coursera」は、スタンフォード大学を中心とする英語の講義で下に全部スクリプトが出てきます。多少英語ができる人は、非常に面白いと思います。無料のプログラムも結構用意されています。「Udemy」は無料もありますが、殆ど有料で日本語のコースです。興味があれば、ぜひWEB教育プログラムを活用し、少し知識を横に広げ、さらに興味があるところを深めていくことに活用されたら良いのではと思います。

以上駆け足ですが、昨今の教育に関する話題について三つ触れさせて頂きました。

最後ですが、年一回、北高あるいは松高のOBとして母校がどうなっているかと思い起こさせるのは(進学情報掲載)雑誌ではないかと思います。昨今、この雑誌から松江北高という字を見つけるのが難しくなってきます。新しく就任された常松校長先生には、ぜひ進学面でも松江北高を発展させて頂き、全国の普通高校の中でもきらきら輝くような高校に進化をさせて頂ければ嬉しいと思います。そういう期待を申し上げて私の冒頭のご

挨拶にかえさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。
(事務局より:本挨拶は令和1年10月19日時点の内容です。今日の状況とは若干異なることを了承下さい。)



井原勝美会長

●CourseraとUdemy

これらの機関がウェブを使った教育プログラムを提供しております。それ以外にもたくさんありますけれども、これは非常に使い勝手のいい、かなり効率的、効果的なWEBで、是非覗いてみられることをおすすめします。



<https://ja.coursera.org/>

●Coursera

スタンフォード大学を中心とする英語の講義でありますけれども、下に全部スクリプトが出てきますので、多少英語ができる人だと、このコースは非常におもしろいと思います。無料のプログラムも結構用意されております。



<https://www.udemy.com/>

●Udemy

無料もありますけどほとんどが有料で、日本語のコースです。なにか興味があれば、ぜひこういったウェブの教育プログラムを活用して、少し知識を横に広げるなりさらに興味があるところを深めていくということに活用されたらいいのではないかと思います。

総会記念講演

「人生100年時代に備える」

～老いも若きも身体の持ちはお手入れ次第～

山田 佐世子 氏(北高17期 昭和41年卒)

【健康運動指導士、元千葉県健康生活コーディネーター、
水泳＆アクアフィットネスインストラクター、
オーツバストフィットネス上志津パーソナルトレーナー】



山田 佐世子

私は、ゆりかごから墓場までと言われた「塊ピー2025年問題」の、皆に一番嫌われる世代です。現在1学年8ルームと校長先生が仰いましたが、当時は確か13ルームまであり、教室は壁ぎわまで50人位生徒が入り、後方におしゃべりをして遊ぶ広さはなかったと思い出します。

今日、そうそうたる方がお話された後、高校で未席を汚していた私がお話をするのははばかられます、先日の台風15号19号で甚大な被害があったばかりで、ご親族やお友達が被害にあられた方に先ずお見舞いを申し上げたいと思います。また、明るい話題ではラグビーと共に、吉野彰さんがノーベル化学賞を受賞されました。新聞に「リチウム電池の博士論文を見出したのが島根県産業技術センター特別顧問の吉野勝美さん」と書いてあったので、ちょっとググってみましたら、松江高校の先輩だと分かりました。ノーベル賞の吉野さんと同じ吉野さんで今77歳。「自分が生きているあいだにノーベル賞をもらってほしいと思っていたことが現実になった」と書いてあり、とても誇らしい気持ちになりました。高校2年時、科学の山形先生が担任で、女子が7人だけの理科系クラスにいました。化学のテストで多分赤点をとった際、いつも「お前、落第でもう1回2年やれよ」と言われるか、どきどきしていた事をこのノーベル賞を機に思い出しました。今でも人生の中でとても残念だと思うのは、高校のときになぜしっかりと勉学をしなかったのか、家も学校も先生も友達も勉強一生懸命できる環境におかれていったのに、もっと本当にスタディすればよかったなど。そういう思いが吉野彰さんと同じ71歳になった今でもあります。松江北高は勉学にとてもいい環境だったなと思っています。

現在は「健康運動指導士」として、中高年の健康づくりのお手伝いしております。「健康づくり」と言うと一番気にかかるのは認知症、糖尿病予防、そして肩こり、肥満の解消をしたい等、色々と心身の不調を抱えたり、経

歳をとれば筋力は誰でも低下しますが、身体を動かしたら栄養補給のために野菜たっぷり、魚や肉、大豆、乳製品をしっかり摂って、毎日の食事からも体力をつけていきましょう。

健康づくりのお話は聴いただけでは、何の役にも立ちません、是非実行していただけることを願っております。



山田佐世子さんよりメッセージ

「松江北高・学び舎の思い出」

験された方もあると思います。10月11日の新聞に「腰痛や肩こりが各3兆円の経済的損失である」という記事を目にしました。一生の間に80%以上の人人が悩まされる腰痛、その経済的損失は年間約3兆円にのぼる、と試算が出ていました。受験生から超高齢者100歳近くまで、腰が重いとかだるいとか不調の方がいらっしゃると思います。今日は幅を広げるとポイントがぼけますので、3兆円の損失を出さないためにも、私たちの老後を楽しく軽やかに過ごすためにも、腰痛対策中心にお話をさせて頂きます。

今日、早くからお出での方は、ずっと座っていらっしゃいます。近年は30分～1時間、学生さんでも30分に一回は立たせましょうという時代です。お足元が悪い方、どこか痛くて立てない方は別ですが、とりあえず手の重さは3キロ、頭の重さも5～6キロありますので、このままの姿勢を取っていると重たくて体に良くないです。なので、みなさんと一緒に体を動かしてから本題に入らせていただきたいと思います。たまには両手を上に上げ「バンザイ！」から手を組んでゆさゆさゆすって、頭・首・背骨・身体全体ゆすりをかけてほぐしましょう。貧乏ゆすりは関節がほぐれ、1日に何度もするといいですよ。ほぐれたところで体力チェック。両腕胸で交差して押し付け、胸からはなれないようにして、ゆっくり立ち上がれますか？次は同じように、片足で椅子から立ち上がれますか？片足立ちできない人ができましたね。人は、階段の上り下りなどにも一瞬片足で支えられないと移動できないので、片足で支えることは大事です。特に腰を守り、足腰丈夫にいつまでも歩けるように、筋トレ4つ、誰でもできる簡単なものをまとめました。『イ～～チ』鼻で吸い込み、『二～～イ』口で吐き出しながら、ゆっくりリズムをとりながら“ゆっくり筋トレ”を実行継続してください。(『転ばぬ先の杖を作ろう!』参照)



城見縄手から坂を上ると、正門に至る。その横に同期の彫刻家・西村文男さんの作品が卒業生から寄贈されたと聞き、足を運んだ。優しい作風に心が和み、去り難かった。家族が皆亡くなり、故郷の色合いが変わってしまった足は遠のいたが、友に会いにまた帰ろう！その折には松江北高校は是非訪ねてみたいところのひとつである。

|懇親会 ミニ・リサイタル

岩井翔平【H22年卒】

エンターテイメントは、現在テノール歌手として活躍中の岩井翔平さんによるミニ・リサイタルを楽しみました。



Photo ————— 懇親会の様子



Photo

懇親会の様子

卒業期毎のテーブルで昼食会を兼ねて、
歓談のひと時を過ごしました。



最前列の主賓席左から、双松会幹事長金平憲様、松江北高校長常松徹様、
東京双松会会长井原勝美、東京双松会副会长毛利信二、北高校内幹事
足立芳樹先生、双松会副会长泉雄二郎様、近畿双松会会长 松本耕司様



第64回総会 毛利信二副会長挨拶

みなさんこんにちは、ご紹介をいただきました、北高27期・理数科6期卒業の毛利と申します。東京双松会の副会長を仰せつかりましたので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

まず、今年も度重なる台風で大きな被害が出ております。お亡くなりになられた方のご冥福をお祈りし、被災されたみなさまにお見舞いを申し上げます。昨年の夏、平成最悪の豪雨災害となりました西日本豪雨災害に対して、国土交通事務次官として、被災者の救出・救命や施設の応急復旧、避難所に入られた方々の生活支援などに全力であたっておりました。しかし、再び今年もこういう大きな被害が発生してしまい、「天災は忘れたころにやってくる」と申しますが、「忘れる間もなくやってくる」と言ったほうが良いくらいです。近頃雨の降り方が変わって来たとお感じの方もいらっしゃると思いますが、実際、非常に強い雨、バケツをひっくりかえしたような雨でもいいましょうか、時間雨量にして50ミリ以上、こういう強い雨が降る量が5年前に比べて4割も増えておりますし、全国の市町村の約9割には土砂災害の危険区域があり、活動している111の活火山に、見つかっているだけでも2000の活断層がある我が国は、いわば危険と隣り合わせということかもしれません。国や自治体も一生懸命対策に取り組んでいるのですけれども施設整備が追いつかないところもあります。この上は、やはり市民一人一人が確実に避難できる、命だけは守られるような、社会全体でそういう態勢に変わらなければいけないんじゃないかなと想っています。

さて、私事で恐縮ですが、この3月に、前の小山校長先生に招かれて、母校北高になんと卒業以来初めてうかがって、1年生2年生相手にお話をしまいました。110分というかなりの長時間、生徒のみなさんあの体育館に体育座りしたままで…途中疲れて、トイレに行ったりとか、かなり昔だったらタバコ吸いにいった人もいたでしょうかと思うんですけど、そういう生徒さん一人もいなかったものですから、驚きました、あまりおもしろい話でもなかったと思いますが、最後まで熱心に聞いていただき、そして立派な感想をあとで寄せていただいて、むしろこちらが感激をしたくらいでした。改めて、さすが北高だと感じました。そして、話のタイトルは「北高生に期待する」としたのですが、終わってみれば、改めて北高生に期待したいな、としみじみと感じた次第でございました。



毛利信二副会長

まもなく新天皇の即位の儀式がございます。ぜひみなさまと一緒に慶びし、そして令和の時代になりましたので災害が多かった平成を振り返って、今度こそ穏やかな平和な年になりますように、みなさまとともに祈りたいと思います。余計なことながら、「五風十雨」という言葉があります。五日にいっぺん風が吹き、十日にいっぺん雨が降る、ごく当たり前の状況、すなわち穏やかな状況をいう言葉だそうです。ぜひ五風十雨の時代になりますようにというふうに、お祈りしたいと思います。

最後にお忙しい中多くのご来賓にお越しいただきました本当にありがとうございました。そして実は台風の直前でありますながらこの総会の準備に関わっていただいた幹事のみなさん本当にありがとうございました。何より今日お足元が悪い中ではありましたけれどもこうして大勢のみなさん、会員のみなさんにお越しくださいましたこと本当に感謝申し上げます。皆様のますますのご健勝とご発展、そして我が母校松江北高のさらなる発展と、そしてこの東京双松会のいやさかを祈念致しまして、簡単ですが締めのご挨拶とさせていただきます。どうも本日は誠にありがとうございました。



活動報告

2019/
第10回 October 10/29TH
東京双松会ゴルフコンペ

参加者8名。いつも当コンペは雲一つない最高の秋晴れに恵まれます。この日も素晴らしい日でした。

表彰式、パーティーも大変和やかに、楽しい一日を過ごしました。

結果は、今回も井原勝美会長(昭和44年卒)が優勝。手抜き無しの本気の部活動の様相ですが、ゴルフ好きの方々は勿論、初心者の方方もお優しい先輩方の指導付きで、とても楽しい会です。

高校時代の部活を思い出して是非ご参加下さい!

東京双松会ゴルフ部 幹事 高根 譲康(S55年卒)



女性の部優勝
山崎 寿子さん(H5年卒)



2019年
忘年会開催

2019/
December 12/11^W

東京プレジュ俱乐部青山サロンにて開催。
14名参加。食事の後、今話題の「人生会議」の一環として「もしバナゲーム」を行いました。

中高年男性10名2グループでの開催は実に異例です。「もしも余命半年」と言われたら、残された時間に何をするのか?というテーマ。自身の価値観と生き方を見つめるカードゲームです。自分の捨てた「価値観」を他者が捨うという、個人の尊厳についても考えます。お酒も入ってリラックスしながら有意義な時間だったと思います。(報告:嵯峨崎)



2020年 *January* 2020/
新会開催
@品川プリンスホテル「カフェレストラン24」



新年会と幹事会を開催致しました。世界的なコロナウイルス騒ぎの中、免疫力がとても高い15名が集いました。現役の大学生から現役引退された大先輩まで、老若男女の情報交換と交流は大変な賑わいの中、あつという間の2時間でした。



近況報告 離れて暮らす家族への想いをつなぐ。

訪問型健康応援サービス「ナスクル」 第67期卒業生 野津直生



2016年に北高を卒業し、法政大学在学中の野津直生と申します。

現在、Community Nurse Company 株式会社(雲南市木次町本店)の新規事業「ナスクル」の立ち上げに参画しており、今回はその活動についてご紹介します。

コロナ元年、顕著になった健康課題。その中でも「地元島根にいる家族の健康をどう守るのか」「帰ってきて欲しいけれど、もしものことを考えると心配」といった、遠く離れて暮らす家族の悩みや、島根で暮らす両親の声を聞き、スタートしたのが「ナスクル」という訪問型健康応援サービスです。

この事業への参画は、私がコロナで東京を離れ、大学のオンライン授業を受けながら島根ごもりをしていた時、「暇しとるんだったら、うちでやーだわね!」と声をかけてもらったのがきっかけでした。私は、松江市で配食サービスを手掛けるモルツウェル株式会社が家業の家に生まれました。将来的には家業継承を見据え、島根を中心に地域の人々の豊かな暮らしにつながるサービスを展開する事業者として挑戦したい思いを持っています。そんな思いの中での「ナスクル」への参画です。

この取り組みを形にしていく上で見えてきたのが、すれ違う家族の本音。「親の心配ごとは増えたけれど、日々の生活に追われて連絡が取れていない。」「子どもに心配をかけたくないから、身体の不安や弱音は吐けない。」家族には、家族だからこそ、時としてそれ違ってしまう想いがあることを知りました。

「ナスクル」が単に体の異変察知だけでなく、本当は想い合っている家族の間に立って、それぞれが気にかけあっているということをさりげなく伝えていく、といった役割を形にしていきたいと思っています。実際に利用している私の祖父母も「ナスクルさんはいつ来るかいね?」と楽しみにしています。健康応援だけでなく、「生きがい」づくりにも繋がると実感しています。

この事業は、「島根発ヘルスケアビジネス補助事業」に採択され、2020年10月より、島根県松江市を中心とした島根県東部で展開を開始しています。今後島根発の元気なうちから健康応援をする先進的なサービスとして、他地域に展開していく予定です。

ご興味ある方は、ぜひ「ナスクル公式サイト」または
以下のメールアドレスまでご連絡ください。
▼ナスクルサポートメール
nusekuru.support@community-nurse.jp





第22期卒業生 富岡寛

東京 特別寄稿 島根

第27期卒業生 羽田昭彦



第二の人生、商社マンから俳優に転身

22期／昭和46年卒の富岡寛と申します。自分の名前については、話題の漫画・アニメ「鬼滅の刃」の重要な役に、同じ点無しわかんむり「富」岡姓の剣士「富岡義勇」の存在を偶然知り、ちょっと嬉しい今日この頃です。

私は理数科の1期生でもあります。実家の場所は本来、南高の校区でしたが、同校理数科設立は北高の1年後でした。要は偶然が重なって北高に入れたのであり、もし1年ずれていたら、双松会メンバーにはなれなかっただけです。このように、運命とは不思議なもの。子供の頃から、波瀬万丈とも言うべき色々な事がありました。幼稚園児の時には放火で家が全焼する直前に脱出する(幸い家族全員無事)とか、小学生では車に轢かれたと思ったら車輪の間に倒れ込んで無傷で助かるとか……。

北高卒業後は早稲田大学理工学部に進学のため上京しました。大学生の時には、下宿先を雷が直撃するとか、路上で二人組強盗に襲われ傘を振り回して何とか追い払う、といった出来事もありました。大学を卒業し三菱商事に就職。すると、そこは、数奇な生い立ちをも凌駕する、モーレツ企業戦士として国内外を飛び回る日々の、とてもドラマチックな世界でした。

商社時代、私の身に起こった事の一部を以下に列挙したら「事実は小説よりも奇なり」。

- ・ある輸出品の船積み立会いの為、月8回、港に出張
- ・投函後の国際郵便物をどこまでも追跡し、相手方到達前に回収
- ・商談の為、米国1週間／ヨーロッパ1週間と、2週間で世界一周
- ・研修では、1か月で米国50州の略半分を回る
- ・中東の某国では、盗賊の出没する街道で車が故障した為、ヒッチハイクする
- ・インド某プロジェクトの為、東京／ニューデリー間を、ひと月に4往復する
- ・アジア某国で、尾行され、電話を盗聴される
- ・アジアの別の某国では、靴を切られる
- ・バンコク駐在時、ある年の来訪者接待日数が363日に達する
- ・同、事情によりレストランの別々の部屋を予約し、客3組を同時並行接待する

等々、思い起こせばキリがありません。このような厳しくも面白い体験を続けさせてくれる三菱商事に、用済みと宣告されるまで居残るつもりでした。が、またまた、どんでん返し!

妻が、何故か若年性認知症になってしまったのです。その時私には、介護離職する道しかありませんでした。ただ、転んでもただでは起きないのが私です。その時、ハタと思ったのは「残りの人生を介護だけに追われるのでは面白くない」そこで発想を大転換、「介護の合間に新しい事に挑戦しよう」と。結果、俳優に転身、という奇策に至りました。

その背景となった意図もありますが、

- ① 辛い介護の隙間時間を使い事で埋めたい
- ② 子供が無い(つまり子孫が居ないので、自分の生きた証として映像に残りたい)
- ③ 商社とは違う形で社会に貢献したい という、スケールもグレードも違う三つの理由から、60過ぎの「新人」俳優に。

日テレ100%出資のタレント事務所、ニチエンプロダクションのオーディションを受け、登録しました。芸名は、自分で思い付き「秋山格之進」とさせてもらいました。これは、

- ① 池波正太郎の時代小説「剣客商売」の主人公、「秋山」小兵衛
- ② 落語「柳田格之進」の主人公、柳田「格之進」
- ③ ご存じ「水戸黄門」の「格さん」こと、渥美「格之進」 という、武士三人分のパクリです。

俳優業でも、これまでの(冒険に満ちた)半生が多少なりとも役に立っていると、感じています。基本的に、現場で何があっても驚かないです。ただし、時間の使い方は、商社と俳優業では全然違います。商社マンは時間を無駄にしない。常にパスポートを用意し、飛び回るか、電話やメールをするか、書類を作成するか……。俳優は「待つ」仕事です。出番待ち、大物俳優待ち、雑音収束待ち、天候回復待ち……。実は、昨年3月に、とうとう妻が他界してしまったので、俳優転身への理由の内ひとつは消滅したのですが、「人生の長さは決められないが、幅はどうにでもなる」という考え方から、幅を1ミリでも広げるべく、続ける事にしました。尚、若い人達に言われてTwitterやInstagram等の各種SNSにも着手。時々ですが投稿もしています。いずれも「秋山格之進」で検索すれば見つけられると思います。ただ、Facebookで友達申請される場合は、原則として「双松会」とか「松江北高」というキーワードを含むメッセージも入れてください。なりすまし等、怪しい物も多いので。

では、俳優「秋山格之進」の応援を、今後共どうぞよろしくお願ひ致します!

1. 松江観光協会メールマガジン〈あとがき〉集

昨年7月から毎月一回、松江観光協会の会員向けにメールマガジンを配信しています。その最後に〈あとがき〉を書き始めました。そのなかから今回、傑作篇をご紹介します。誰も選んでくれないので、自分で選びました(笑)。

【11月号】

「あの方」という松江弁がとても好きです。
「あの人」でもない「あの方」でもない「あの方」。松江独特の、あの方表現です。
「あの方」だと、少し突き放した感じで、どちらかというと否定的な響き。
「あの方」になると尊敬の念が漂います。ただし、その人の間には距離感がある。
その点「あの方」は温かみがあって、聞いている方はコミカルな印象さえ持ちます。
よく人生のベテランが使っておいで、ぼくはそれを聞くたびに心なごみます。
いつまでもこの表現がなくならないといいなあ、と思いつつ…。

【9月号】

秋の1日、宍道湖にウナギ漁に行ってきました。といっても、もちろん一人ではなく、宍道湖漁協の組合員さんの船で。
宍道湖のウナギ漁師さんは数十人いらっしゃるそうですが、主な漁法は「はえ縄」だとか。しかし、その人のやり方は「うなぎ竹筒漁」と言われるもので、湖底に沈めた筒をウナギが寝床にしたところを、そっと引き上げて生け捕る方法です。
「この漁法は魚体が傷付きにくく、また手軽なことから、現在天然ウナギの漁法として広く行われています。」という解説がネットに載っています。
魚果ですか? なかなかの大漁で、1キロほどの大ウナギも獲れました。
しかも、ピックリするような場所で、近所の魚屋さんに訊くと、「1キロのウナギを競りにかけると、そうですね、12,000円から15,000円はするんじゃないでしょうか」。
見学していただけのぼくも興奮して、大ウナギの写真を撮り損ねました。

【7月号】

梅雨時、片原町の京橋川ほとりに咲く合歓の木の花が、とてもほのかで、心を癒してくれます。その盛りも過ぎた今朝、殿町の「ろんぢん」の庭で白いアジサイが輝いていました。調べると、「アナベル」という植物のようです。アナベルは緑→白→緑と色が変化して行くのだそうで、この妖精のような花が見られると思うと、しばらくは通勤が楽しくなります。

2. 松江老舗旅館の底力

元高知県知事の橋本大二郎さんは、70歳を超えるいまも、姉さま女房の孝子夫人に首ったけです。その橋本さんを10月初旬、ぼくがプロデュースするトークライブ「くるま座」(月一開催)にお呼びしたときの話。

玉造温泉から出雲大社に向かう車中、大二郎さんに同伴していた孝子夫人が声が弾ませて、「羽田さん、もうピックリしちゃった。昨日泊まった皆美の中居さん、前にわたしが泊まったときもお相手してくださったんですって。20年以上も前よ。そんな偶然もあるのねえ」

玉造温泉の11月は「Gotoキャンペーン」と「しまねプレミアム宿泊券」効果で、連日大盛況です。



忙しい仕事の合間をぬってインバウンドに応じてくれた川角共子さんこそ、橋本夫妻を感激させた、佳翠苑皆美の客室係でした。新型コロナ対策で終始マスク姿の川角さんに、そのいきさつを訊きました。

「橋本大二郎さまと奥さまが宿泊されることは、その日の“予約状況”で知りました。と言いましてもいまのシステムは、昔のようにお出迎えからお見送りまで、すべてをひとりの客室係が担当するようなことはありません。その日私は、11テーブルある“夜のお食事処”的うちの3部屋分が担当でしたが、そのなかに、たまたま橋本さまご夫妻がいらしたんです。そこで思い切って声をおかけすると、『たしかに玉造温泉に来たことはあるけど、どこに泊まったかは覚えてない』(笑)」



——橋本大二郎さんが高知県知事時代のお話ですね。

「はい。私がこちらで働き始めたのは平成5年です。それから多分3年以内の出来事ですから、やはり20年以上前ですね。そのとき橋本さまはご主人ではなく、別の女性のお客さまと一緒にいました。お部屋も覚えています。661号室、いまもある吉祥の661号室でした。お部屋に伺うと、お連れの方がいい香りのする、お香を焚いてらして、『こちらのご夫婦はとても仲がいいのよ。大ちゃん、孝ちゃんって呼び合う仲だものね』と、笑っておっしゃいました」

最後に川角さんに、「日ごろ心掛けていることは?」と訊くと、「お客様には日常から離れたこの時間を、できるだけ楽しんでもらえるようにしています。具体的に? なるべく地元の話を選んでいます」

……些細なエピソードですが、こうした従業員の何気ない心遣いこそが老舗旅館の底力なのかもしれません。



3.たった1つのツイート(Twitter)で注文が殺到した会社の話

松江の「やすもと醤油」がちょっとバズってますね～

<https://twitter.com/yasumotoshouyu>

そんなメールが8月27日、東京で仕事をしている娘から、Twitterをやらないぼくに飛び込んできました。

すぐに東津田町の「やすもと醤油」に電話したところ、「そうなんです。が、今日急に沢山の注文がきました。なぜだかわかりません。普段の日は2、3件しかないのが今日は100件。対応に手一杯で、いまはお話しできる余裕がありません」(社長夫人)

8月26日

(一応)企業アカウントなので成果がないとtwitterを辞めさせられてしまう厳しい世界です。うちのアカウントを見た上司と同僚が「フォロワーが40人もいて、いいねもたくさんついててメチャバズってるじゃん!」と言っていました。当分の間は大丈夫そうです。

一見何の変哲もないような書き込みですが、Twitterのフォロワーが40人というのは、SNSの世界でほとんど無視されているも同然。なのに、この会社の人たちときたら、40人の意味を知ってか知らずか、素朴に「バズってる」(人気が沸騰している、の意味)と喜んでいる。それが、「ほっこりしている、いい会社だ」という評価になり、一気に注目を集めたようです。

何が待っていたかというと、

「それからずっと休みなく働き続けです。先週日曜日によく休めました」

電話から1か月後、ようやく面会がかなった安本隆政社長は言います。

「24時間で、一気に6万人にフォロワーが膨れ上がることは、1年間に1件あるかないかの事例だそうです(現在は87,000人)。うちは通常だと、200mlの小瓶を1日に2,000本程度しか生産できません。そこに注文が殺到したので、通販サイトはすぐに閉じました」

しかし事態はもう一回動きます。

9月1日、追い討ち(追い風?)をかけるように、フジテレビ系列の生活情報番組『ノンストップ!』(NON STOP!)がこの現象を放送します。すると、

「全国放送の影響力はすごいですね。もう一日中電話が鳴りっぱなし。ある得意さんからは、『あんたんとこの電話、受話器がずっとはずれちゃった?』って言われたくらいです。じつはうちの売り上げは、県内より北は青森から南は沖縄、海外と、ほとんどが県外です。ヤオコーナー北野エースなど、普段から付き合いのあるスーパーで欠品するわけにはいかないので、個別の販売を中止したのです」

「そもそもSNSは、コロナのせいで今年5月にガクンと売り上げが落ちて、やむにやまれず始めました。でも『怖いな、SNS』というのが正直なところです。『いい、いい』と言ってくれるときはいいですが、逆に転ぶと大変。SNSの担当には『絶対に炎上だけはしてくれるなよ』と言ってます」

いま、やすもと醤油のHPを覗くと、すべての商品が「在庫あり」と表示されています。

<https://www.yasumoto-kk.jp/>

やすもと醤油の主力商品は「くんせいナッツドレッシング」だとか。皆さん、この醤油屋さんご存じでした?



リレーメッセージ

第1回 (2019年7月23日)

毛利 信二氏
(北高27期/理数科6期)

東京双松会の皆さん、こんにちは。27期、理数科6期卒業の毛利信二です。今年から東京双松会副会長を仰せつかりました、宜しくお願い申し上げます。

昨年の総会でお目にかかった小山校長(当時)からの御要請により北高生の前で話すこととなり、今年3月20日ほぼ卒業以来となる母校訪問が実現しました。今や東高、南高と3校併せても一学年20クラスにしかならないとの校長のお話に驚いたものの、「北高生に期待する」と題した二時間近い私の話を、体育館の固い床に座った姿勢で生徒達は最後まで熱心に聴いてくれました。

昨年国土交通事務次官を退任した私には、37年間の国家公務員生活で経験したこと、感じたことをありのままに画面と言葉にする以外術はない訳ですが、国会との立ち位置、法律策定作業などやや特殊な霞ヶ関の世界をどう伝えるか、随



分思い悩んで準備をしました。例えば、「国民の声を聞く」と政治家がよく使いますが、国家公務員もそれは大事です。でも世論って何だろう? 乃木坂46というグループの「インフルエンサー」というヒット曲の中に「気配以上会話未満」というフレーズが出てくる。「…恋はいつも余所余所しい」と続くのだが、世論とは「気配以上会話未満」のものと言えるかも知れない、それくらい分かりにくく、掴みにくいもの、だから、いつも気をつけて本当にそれが国民の声なのか尋ねる姿勢が大事です、とか、平成最悪の水災害となった昨年7月の西日本豪雨災害にどう対応したのか、当時の私の手帳を画面に映し出しながら官邸との緊張したやりとりを語ったり、と出来るだけ身近なところからお話ししたことも奏功したのでしょうか、講演前の心配を吹き飛ばすような嬉しい反応を、後で送っていただいた生徒達の感想文で知ることになりました。

その一部は北高HPでも見ることができます。
(<http://www.matsuekita.ed.jp/files/20190327131842.pdf>)

今回の講演は、私の人生を振り返る良い機会にもなりましたし、講演を終えて改めてみじみ思つたのは、これからも「北高生に期待する」ということでした。



第2回 (2019年8月22日)

西尾 康英氏
(北高27期/理数科6期)

理数科から医学部に進みましたが、理系より文系の科目のほうが好きでした。当時の北高には兼折校長の下、国語、英語、社会科に良い先生がおられたこともあり、選択で世界史のクラスを取りましたが友人からノートを借りて日本史を、仏語や独語をNHKラジオで独学するなど、受験勉強には関係ない科目ばかり勉強していました。父方祖母の実家が書店を営む天神町の漢学者であったDNAにもよるのでしょうか。医学部に進み医師になってからも、生老病死の背景にある目に見えない運命を操る力を知るべく、真言宗系の寺で研鑽し10年がかりで教師資格を取得しました。そんなわけでアマチュアの歴史家や市井の僧職よりは、正しい神仏の知識があると自認しています。

真言密教の強みは、曼荼羅に象徴される神仏のランク付けと性格を明確に教えてくれることです。曼荼羅界の一番外側に配置されているのが、人間界に最も近い天部の神々で、全てを悟り人間を超えた仏様と違い、嫉妬を抱き時には天罰も与える、どこか人間的な要素を持った方々です。ですからお稲荷様や弁天様にはお供えを欠かさず、神樂奉納などを通じてたえず感謝の念を示さないとご加護は得られません。松江城の守護神、城山稻荷の神様が寂しがっていたので出雲郷神社への里帰り接待をしたことが、ほうらんえんやの起源とされていますが、もうお一方、別の神様がその陰にいることにお気



づきの人はいますか?

松江から出雲郷への道中、当時の幹線路大橋川を下る途中で嵐に巻き込まれ、お稲荷様があやうく沈没しそうになったのを沿線の住民が総出で救助したことが、ご神体を閉む船団パレードの由来ですが、祭りのメインイベント、櫂伝馬船の踊りは誰に見てもらうためのパフォーマンスだと思いますか? 河岸を埋め尽くす観客向けではないことは想像ができますが、神樂を奉納する対象は城山稻荷のご神体ではなく大橋川の神様ではないでしょうか。天部の神様は、稻荷様に代表される地界の神様とともに、天界の神様の二系統があり、後者は弁天様に代表される川の守護神もあります。弁財尊天は仏教と共に渡來したインダス川の神をルーツとする外国招来の神ですが、日本古来の川の神々も大勢いらっしゃいます。天と地の護法の神の共同のご加護があって初めて、豊かな実りと交通安全が保障されるのです。城山稻荷だけでなく自分のことも忘れるな、と大橋川の神様の嫉妬の怒りが水難事故を起こしたことを当時的人々は認識し、二回目の里帰り神幸祭からは道中の無事故を願って大掛かりな水上神樂を演出したのだと思います。

それでは大橋川の神様のご神体と本籍はどこにあるのでしょうか。おそらく中海、大橋川、宍道湖の沿岸に位置する、美保関神社や松江の賣布神社など隨所に祀られている複数の神々で、ルーツをたどると上流の斐伊川に行ききます。その源流がおわかりですか? そうです、出雲人なら誰でもご存知の八岐大蛇です。素戔鳴尊の八岐大蛇退治伝説は、ヤマトの武力と技術力による出雲支配と斐伊川治水事業を神話化したものであるとともに、八岐大蛇に象徴される出雲古来の神からヤマト天皇家の守護神、伊勢神宮祭神への改宗神話であ

るともされています。青銅器文明化から鉄器文明へ、部族社会から中央集権社会へと時代が進化する中で、出雲は日本の首都から今や日本のチベットとも揶揄される鄙地になってしまいましたが、それは出雲の守護神を冷遇した祟りではないでしょうか。

八岐大蛇の斐伊川は氾濫を繰り返した荒川でもあります。が、國引き神話にたとえられた、米どころの斐川平野を造成し、堀尾吉晴公による松江橋北市街地造成の土木事業にも貢献し、多大な恵みを出雲にもたらした繁栄の源泉であり、その御恩をけっして忘れてはなりません。ヤマトは出雲から國譲りにより日本の支配者になりましたが、出雲は武力では征服できても、守護神の靈力では抗い難い脅威であったのでしょうか。大国主命の靈を出雲大社に封じ込め、黄泉の国を穢れた世界と忌避して交流を斜断し、守護神を惡役にみたてて出雲の弱体化をはかったのが、ヤマト創作の記紀神話に隠された眞実では

ないかと推察します。

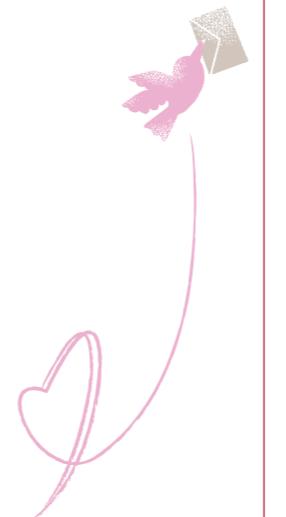
日本海軍のフラグシップ、國を守る最大級の軍艦が戦艦大和から護衛艦に変わった今日、時代はどこか出雲の復活を暗示していると感じませんか。今でも石見地方では、幼稚園で神楽を教えているそうです。テレビのインタビューで子供たちに、お神楽の中で何が好き、と聞いたら元気よく「やまたのおろち」と答えていました。これは単なる文化遺産の保護、継承でなく地元守護神の復興です。昨年の西日本豪雨でも幸、島根県には大きな被害が出なかったのも、山陽地方と違って人口過疎で宅地の造成が行われていないことだけではなく、天地の神々のご加護の賜物あることを認識すべきでしょう。ほうらんえんやは10年に1度だけ、などと言わず毎年、斐伊川上流の八岐大蛇を祀る神社から美保関神社に至る斐伊川水系の神社総出で、盛大な水神サミットを企画してみてはいかがでしょうか。

第3回 (2019年9月30日)

大森 善郎氏
(北高27期/理数科6期)



「囲碁のプロ・アマ戦に協賛し、日本の若者を応援」
~海外駐在の会社員から、起業して教育の世界へ~



私の父親は船乗りでした。船といつても、イランやイラクなど中東諸国と日本を行き来する石油タンカーです。従って海外航路から日本に帰国する父親に会うのは3ヶ月に一度のこと。母親に手をひかれ24時間かけて夜行列車で旅をして、横浜・新潟など石油コンビナートのある港に、父親に面会に行く生活でした。父親は海外から原色の美しい蝶々の標本をお土産を持って帰ったり、エキゾチックな外国の街の写真を見せてきました。そして、いつしか私は(ボクも世界を見てみたい!)と夢見るようになりました。

大学を卒業し、就職するとき、安定した会社と海外駐在が囁きられる小さめの電機メーカーに受けました。どうしても海外に行きたい気持ちが強かった私は、周囲の反対を押し切り、小さな会社を選択しました。会社員になんでも語学学校に通うなどを積み重ね、アメリカ・ヨーロッパに5年間の駐在をし、世界中を駆け巡る夢をかなえることができました。30才で外資系のフィルムメーカーに転職し、責任ある仕事を与えられ、充実した日々を過ごしていました。

しかしフィルム写真の時代は終わりを告げました。デジタル化に乗り遅れた会社からの早期退職のオファーを受け止めるしかありませんでした。これからの人生をどうするか、考えました。このまま新たな転職を繰り返すのか…それよりも(自分のやりたいことにチャレンジしてみたら)という心の動きが消えませんでした。そして、自らの夢をつかんだ経験を活かし、今度は「若者の夢をかなえるお手伝いをしたい」と考え、教育の世界に転身したのは40才の時でした。

最初はフランチャイズの進学塾として起業しました。子どもたちと触れ合るのは楽しい。でも、無理に「勉強をさせる」ようで、なんだか自分の性に合わない、と感じる日月。そんなある日、

通信制高校から「サポート校」をしないかという誘いがありました。話を聞くと、様々な葛藤を抱えた生徒が最後に笑顔で卒業するのを見送る仕事。これこそ自分の天職と感じました。

株式会社ワイスアカデミーとして起業しました。世界で活躍する若者を育てたい、若者(Youth)に夢を与える、と起業した善郎(Yoshiro)の教育施設、それが Y's Academy(ワイスアカデミー)です。通信制高校で学ぶ生徒は、プロスポーツや芸能界と学業を両立したり、それぞれの悩みや夢に向かって精一杯に生きています。この若者たちに「あたたかい居場所」を提供し「自立心と思いやり」を育んでいます。

ー 新たな夢、囲碁の世界でも若者を育てる ー

囲碁の日本棋院に協賛し、2019年からプロ・アマの十代の若者が競う棋戦「ワイスアカデミー杯」を開催しています。

◆ワイスアカデミー杯の公式サイトを是非ご覧ください。

以下は私の挨拶文となります。

< ご挨拶 >

囲碁界では、かつて日本が、世界をリードする中心的存在でした。それが今や海外の後塵を拝しています。大森は、かつて日本が世界の中心だったエレクトロニクスのビジネスに20年も関わりました。囲碁もエレクトロニクスも課題は共通です。「若者を育てる」こと無くして、将来の発展はありません。

日本棋院では小学生までのプロ採用制度を新設し、仲邑董初段が史上年少の10才でプロ入りし、初勝利は新聞の1面トップ記事になるほど注目を集めています。囲碁ブーム復活の機運が高まつた今こそ、世界トップ棋士を目指す子どもたちをサポートする絶好の機会です。

ワイスアカデミー杯という新たな棋戦に協賛させていただくことは「世界で活躍する若者を育てる」共通の理念の実現であり、至上の喜びです。サッカーのワールドカップで、日本の選手・応援団は「きれいに清掃する」ことで世界から注目されました。囲碁の世界においてこそ、日本がマナーも強さも世界トップに輝く、その日が来る事をワクワクしながら期待し、応援しています。

第4回 (2019年10月31日)

羽田 昭彦氏
(北高27期)

松江観光協会 観光プロデューサー 「43年ぶりの故郷松江にて」

10月初旬、富山県に出張してきました。南砺市城端で開催された会議に出席するためです。いきなりですが皆さん、開催地のこの地名が読めますか?ぼくは読めませんでした。特に町名は、時間を置くとすぐに忘れてします。

南砺市城端⇒なんじょうはな
これが正解です。では、これはどうですか。

上乃木⇒あげのぎ

松江の人でこれを読めない人はいないでしょう。しかし先日、東京から友人が来て、「上乃木って何て読むの?」そう聞かれてびっくりしました。そうしてみると、松江の地名は難しい。

秋鹿 忌部 雜賀 母衣 千酌 朝酌 芹町 袖師 白潟 馬潟
大海崎 生馬 法吉 手角

芹町の「芹」とはイラクサ科の、背の高い雑草だとか。芹町は江戸時代の松江古地図にも登場する由緒ある町名ですから、宍道湖にはほど近い地域には多く繁茂していたのでしょう。でも芹町(おまち)なんて誰が読めます?旧八束郡の町名もそう(宍道 八束 美保関 恵曇 七類)。いやそもそも、松江の周辺主要都市(出雲 安来 米子 境港)だって、たとえば関東圏の人で全部正確に読める人はどれほどいるでしょうか。松江名物「篆行列」だってそう。ホーランエンヤの「渡御祭」「還御祭」もそう。松江の人は、それが読めて当然という顔をして、フリガナを振ろうなんて考えがありません。

そんな故郷松江に43年ぶりに戻り、4月から松江観光協会という職場で、観光プロデューサーなる仕事を始めました。

北堀の、築30年のライオンズマンションで賃貸生活をしています。(松江に三井三菱や東急など大手ディベロッパーのマンションは皆無です。ほとんどが大京穴吹!)

「宍道湖か松江城の見えるマンションで」という妻の希望を、



最低限叶えることはできました。部屋から松江城の天守がかかるじで見えます。しかし夏になり、お城の周りの木々が成長すると、天守はほとんど隠れてしまい、妻は黙り込みました。

松江に帰り、最初に驚いたことがあります。横断歩道の前でいつもしていると、ほとんどの車が停車してくれるのです。都内ではありえないことなので、これは松江市民のやさしさの表れだと思うと誇らしく、都会の友人に宛てた転居のあいさつに、そのエピソードを添えました。しばらくたったある日、観光協会の常務理事の車で移動したときにそんな話を振りました。すると、彼はちょっと小馬鹿にしたような表情で言い放ちます。「(島根)県警の取り締まりが厳しいからですよ。横断歩道を人が渡ろうとしていたら、止まる。道交法にも書いてあります。その人に渡る意思があろうがなかろうが、とにかく止まる。(市役所前)ここでそれを無視して走り去ろうとして捕まった市の職員は何人もいますよ」

なんだ、松江のドライバーは親切というより、キップを切られるのを恐れていたのです。このエピソードを綴ったメールは、配信前にゴミ箱行きになりました。

次に驚いたのは、「○○してもらうと喜びます」という表現を聞いたときです。ご承知のように、この場合、喜ぶのは自分で。つまりこの表現は、「○○してください」、そうすることで「私を喜ばせてくれ」とまあ、何ともおおらかな命令をしているわけです。昔、確かに聞いたことのある、とても懐かしい響きでした。ただそれを妙齢の女性が発していたので、不思議な感じがしたものでした。

出雲弁(松江弁)をしゃべる感覚を少しずつ取り戻したころ、いまは広島にいる母親の携帯に電話しました。母親は生粋の松江人なので、思い切って「どうだかね?」と切り出してみました。
「どうだかね」「はあ~?」「どうだかね」「あんた、誰?」「昭彦だがね」「わしゃ騙されんよ」

電話は切れました。そんな日常を過ごしています。

(どんな日常なの?←自分のツッコミ)

で肝腎の、観光プロデューサーってどんな仕事か?

それはまた別の機会に(♥)。



第5回 (2019年11月28日)

吉添 理恵子氏
(北高42期)

第4回の羽田昭彦氏(北高27期/昭和51年卒)からの紹介です。この度リレーメッセージのご指名を受けました、吉添理恵子と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

約30年前の松江北高生時代は、合唱部の練習に励む毎日でした。また、休み時間や放課後に図書室で本を借りまくったり、司書の先生や友達と、小説や漫画の話に花を咲かせていたのもよい思い出です。

そこで培われた本への愛が止まらず(?)出版社に入社。20年近く女性漫画誌に関わった後、現在は児童書編集部で『ち



びまる子ちゃんの整理整頓』『マナーとルール』『時間の使いかた』などを担当しています。(子どもの生活に役立つ内容を漫画で楽しく紹介していますので、お子さんやお孫さんにオススメです♪←宣伝)

そんな中、初めて担当した図鑑『博学王 13 1/2のビックリ大図鑑』が今秋発売されました。世界トップクラスの図鑑出版社DK社から世界15か国で刊行され大人気のエンタメ図鑑で、大迫力のビジュアルと、知的好奇心を刺激する80テーマ、「いつも食べているバナナはクローン!?'など1テーマにつき13項目プラスアルファのビックリ知識がギッシリつまっているのが特長です。(←また宣伝)

そしてこの度、日本の「博学王」といえばこの方! 林修先生が、この図鑑を推薦してくださいました。インタビューさせていただいたのですが、その際に林先生から、こんな興味深いお話

をおうかがいすることができました。

「この図鑑はビジュアルもテーマも解説もまとまりすぎていらないからこそ、子どもは読むとさらに調べたくなるだろうし、自分なりにまとめたくなるでしょうね。大事なのは、そうやって自分なりに好奇心を持って、整理して咀嚼した知こそが、真に自分のものになるということ。そして、長く財産として残るということなんです。」

林先生も小学生の頃、大河ドラマから「源氏」にハマって、図鑑や百科事典、歴史本などを片っ端から読んで、清和天皇からの家系図を作り続けたとのこと。調べたことをどう自分なりに整理するか、試行錯誤を繰り返すうちに、歴史が得意になっていたそうです。

そういう私も、中・高時代に小説や漫画にハマったときは、何度も読み返したり朗読したり、それに飽き足らず相関図を作ったり、果ては登場人物に宛てて日記を書いたりしていました(私の場合は完全に黒歴史ですが)。でもそれが現在の編集者という仕事につながっているのですから、案外ムダではなかったのかもしれません。

松江北高は、勉学はもちろんですが、部活や文化祭(懐かしのペーパージェント!)をはじめ、自分が興味を持ったこと、好きなことに邁進できる、よい学校だったなあと、今になって思います。東京在住のため息子たちを松江北高に通わせることはできず残念ですが、彼らにもそんな実りのある高校生活を送ってほしいなと思っています。

そうそう、林先生は、こうもおしゃっていました。「子どもが興味を持つには、何かしら外部からの情報が必要です。どこに反応するかわからないから、親はたくさん情報を与え続けることが大切。「知の入口」となる『博学王』の中から、僕の「源氏」のように、自分だけの“好き”を見つけてもらえたならと願っています。」

これからクリスマスシーズン、お子さんお孫さんへのプレゼントにぜひ、『博学王 13 1/2のビックリ大図鑑』をご検討ください♪(←最後まで宣伝にて失礼いたしました!)

『博学王 13 1/2のビックリ大図鑑』特設サイト

第6回 (2019年12月25日)

吉添 圭介氏
(北高39期)

吉添圭介と申します。吉添理恵子の「兄に頼めばよいや。」という安易な指名により、令和元年のオオトリを務めることとなりました。どうぞよろしくお願いいたします。

「このHPを私の拙文で汚してよいのだろうか。」と恐れおののきながら、参考のために過去のリレーメッセージを見ると、…4回目までは、27期(昭和51年卒)の先輩方の格調高いメッセージ。自分には無理だと逃げ出したい気分。でも、前回の我が妹のメッセージは、…申し訳程度に高校時代の思い出に触れつつも、終始一貫、自分が出版社で編集した本の宣伝。なんという格調の低さ!妹よ、ハードルを下げてくれてありがとう!

と言って、私には、皆様が关心のありそうな話題も、宣伝する材料さえもなく、とりとめのないメッセージになりそうです。ご容赦を。

今日はクリスマス。我が家でも、小学一年生の息子の枕元にはサンタさんからのプレゼントが置いてありました。実は、昨日の晩、息子に「パパ、サンタさんが来るところを見たいから、スマホのビデオをここにセットして、一晩中この部屋の入口が映るようにしておいて。」と頼まれ、対処に困っていました。作戦を考え、今朝、「サンタさんって人に見られるのが嫌だから、一晩中起きている人のところや監視カメラのあるところには来ないんだって。一晩中起きて待っていてプレゼントがもらえないかった子もいるんだって。このことを思い出してよかったです。もし撮ってたら、来てもらえないところだった。」と説明し、喜んで納得してもらいました。「猿蟹合戦」(動物はもちろん、牛の糞や臼までもが大活躍するお話)でさえ、「これって本当の話なのかなあ。」とまだ半分は信じる気持ちのあるお年頃です。しばらくは眞実を隠しておきたいものです。

そんな息子が、来年早々、剣道教室に見学に行きます。何を隠そう、私は、高校時代は剣道部員。その後、大学でも剣道部に入り、社会人になんでも細々とですが剣道を続け、質実剛健、文武不岐を合言葉に、彼女いない歴も長期に渡る硬派な人生を過ごしてきました。以前は剣道を勧めても嫌がっていた息子が行く気になったきっかけは「みーちゃん(幼稚園時代の美人同級生)が剣道を始めたんだって。」の一言です。この軟派ぶり、パパの硬派ぶりからは考えられません。

息子のお友達の半分ぐらいはサッカー教室に行っています。ママも昔は「サッカーをやらせたい派」でしたが、今のママは、「剣道をやらせたい派」になっています。息子が(きっかけはともかく)剣道に興味を示していることを喜んでいます。今年「ONE TEAM」で有名になったラグビーの紳士ぶりに比べ、サッカーには、「オレがオレが」という自己中心的な性格が求められる。審判が見ていないところで悪いことをする。サポーター同士が殴り合い、殺し合う。」というイメージがあります(サッカー部の方、申し訳ありません。若干誇張した悪いイメージです。もちろん、私のイメージではありません。高校時代のサッカー部の友人はみなイイ奴です。)。剣道の場合は、「一本」を取ってガッツポーズをするとその「一本」を取り消されるという礼儀に厳しい武道です。柔道のようにオリンピック種目になると、そういう良い面が失われるため、日本の剣道界がオリンピック種目になるのを拒んでいると聞いています(「オリンピック種目になれないからそう言っているだけだろう。」などと、からかわれることもありますが。)。こういう話をしながら「サッカーより剣道がよいかもしょ。」とママを洗脳して来たのが、最近効いてきたようです。

最後に、仕事の話も少し。私は、今、消防職員が救急救命士の資格を取るために研修所に勤務をしています。建築物の不燃化や防火意識の高まりなどにより火事は減少していますが、救急搬送は高齢化などで増加し続けています。お正月は餅をのとに詰ませて救急車で運ばれないようご注意下さい。(救急振興財団審議役、救急救命東京研修所副所長)

第7回 (2020年1月29日)

赤井 泰博氏
(北高39期)

松江北高普通科第39期卒の赤井です。東京に来て30年近く。私の近況をお伝えしたいと思います。

現在、私は「二足のわらじ」ならぬ「三足のわらじ」を履いています。①経営コンサルタント業②ワイン輸入業、そして③小さなイタリアワインバルの店主、というものです。

一つ目の経営コンサルタントですが、国内大手経営コンサルティング会社勤務を経て、2012年に独立してコンサルタント会社を立ち上げました。業界問わず中小規模の企業にお邪魔し、経営者にアドバイスをさせていただいている。お付合いが始まると、売り上げ、利益は毎年着実に伸び、数年もすると社員数も増え、大きな成長を遂げていることもしばしばです。ポイントは、クライアントが持つ長所を見つけ、伸ばすこと。これまでの経験から、成長するクライアント(経営者)の共通点は「素直で、努力を惜しまず、謙虚」であることだと感じています。と偉そうなことを言っていますが、たまたまそんなクライアントに恵まれただけとも思うことも(笑)。でも、コンサルティングの仕事を通じて、組織の成長、社員の方々の笑顔を見ることができ、とても有意義な仕事であるのは確かです。

そして、ワイン輸入は2013年からスタートしました。実は、ワインの輸入を始めるまでアルコールで好きなものといえば国産ビールで、ワインのことは門外漢。しかも、輸入なんて…??? という感じ。そんな私がワイン輸入を始めたきっかけは、経営コンサルティングでした。日本のワイン市場に参入したいというイタリアのワイナリーが市場調査を依頼。市場を調べるうちに私自身



がワインの可能性に惹かれて当事者としてワインビジネスにタッチしたいという想いが強く芽生え、輸入業者としてビジネスをしようと決意をしたのです。今は、毎年一定量のワインを輸入しています。定期的にワイナリーの所在するイタリア北部ピエモンテ州も訪問し、葡萄畠、ワイナリーの生産設備の確認や商談を行っています。なんと、日本では私だけが輸入するワインです。

最後のワイナリーの店主は……もうおわかりですね。「ワインを輸入しているなら自分の店で並べてしまえ!」と思い至り、イタリアワインバー「アルゴヴィータ」を2017年2月に神保町に開店してしまいました。これまた、飲食業未経験(オイ)。厳しい飲食業界の実状を踏まえるととてもリスキーな船出だったかも、と今でも思うことがあります。しかし、おかげさまでこの2月1日に開店3周年を迎えます。神保町の小さな店ではありますが、この店では本当にたくさんの出会いが起こります。性別、年齢、職業、国籍、出身地等を超えて、様々なお客様が来店されるのです。しかも、店内では常連のお客様はもちろん、初めてのお客様も、気軽に楽しく飲み、会話をしています。店内で交わされる、何もかもを超えた多岐にわたる話はとても刺激的で、私自身いつも勉強させていただいている。もちろん輸入しているイタリアワインが品揃えの柱ではあるものの、島根県出身者として地元の食材やお酒も時折ご提供して、島根県のPRもしています。島根県以外のお客様にも大変好評です。高校時代の同級生たちも、心配して頻繁に来店してくれており、その時はさながら同窓会が開催されたようにぎやかです。

そんなお店ですが、機会がありましたら是非ご来店ください! 「松江北高(松江高校)出身!」の合言葉でサービスさせていただきます!

(第6回吉添圭介氏からの紹介)

第8回 (2020年2月12日)

錦織 功政氏
(北高39期)

皆様、はじめまして。私は39期の錦織功政(にしこり のりまさ)と申します。

東京の大学を卒業後、旧大蔵省(現財務省)に入省し、以後、本省勤務や出向を繰り返して今日に至っています。入省時(平成5年)は旧銀行局に勤務し、あの金融危機の最初のステージを目の当たりにしました。のちに住宅専門金融会社(いわゆる「住専」)処理のため投入された国費6,850億円——その後の金融危機対応には桁違いの公的資金が投入されるのですが——という金額は一生忘れないでしょう。特に主計局は人使いの荒い職場で、最初は面白がってやっていた連日の徹夜作業も、そのうち身に堪えるようになり、日曜は一日中寮で寝溜めしておかなければ身が保たない有様でした。結婚後は多少まともな生活になりましたが、午前4時に帰宅すると妻から哺乳瓶のバトンタッチを受け、舟を漕ぎながら乳飲み子に授乳させていたのがまるで昨日のように思われます。



その後、在スペイン日本大使館の勤務(一等書記官)を命ぜられて家族一同マドリッドに赴任し、3年のあいだ一度も日本に戻らず異国の地で悪戦苦闘しましたが、現地の皆さんに助けられて有意義な駐在生活を送ることができました。また暫くの後、次は熊本県庁で企画振興部長として働くことになりました。息子たちも大きくなって東京の学校に馴染んでおりました。故、今度は単身赴任。知事公舎真向に建つ築40年の一軒家で昭和期の貧乏学生のような生活でしたが、仕事はとても充実していました。霞が関とはまったく違う視点から地域の課題に向き合い、様々な人々と膝を詰めて向き合いながら議論し、ときには酒を酌み交わしながら相手の想いを汲み取った末に、両者ギリギリの解を導き出す経験は、何物にも代えがたく思われます。ちなみに、どんな地で働くとも、「此處ではこうなっているけど、島根ではどうだろう?」と、つい故郷に想いを馳せてしまうのは何故なのでしょうね。

一昨年前より復興庁に出向し、総括担当参事官として勤務しています。東日本大震災の発災から9年が経とうとするなか、今後の復興のあり方を再考して事業や組織のあり方を見直すべき、重要な時代の節目に立ち合う機会を得ました。その他人事や復興大臣のサポート業務まで担当させて頂くなど、非

常にやり甲斐のある任務に日々身の引き締まる思いがします。被災地の復興を進めていくと実感するのが、我々の日常生活が様々な方面の様々な(外からは見えづらい)努力のおかげで成り立っているという事実です。官民の事業・サービスだけでなくコミュニティ(人々の繋がり)といった広義の「社会インフラ」がひとたび崩れてしまうと、元通りにするには莫大な時間と費用がかかります。この状況を目の当たりにすると、全国各地で進行する「少子・高齢化社会」の行く末を垣間見ているよりも思われます。やはりそんな点でも、故郷の将来が気にかかります。

このように、職業生活はそれなりに充実しておりますが、私生活の充実もある意味それ以上に大切なことだと思っています。

子供のころから色々なことに手を出してきましたが、今も変わらず続けているのは「魚釣り」だけでしょうか。私も皆様と同じように、物心ついた頃より宍道湖でゴズを釣り、シジミを掬っていました。上京後は多忙のため一時途絶えていましたが、留学の際にフライフィッシング(西洋式毛鉤釣り)と出会い、帰国後は月一回の釣行を欠かさず楽しんでおります。山縄を縫って渓流に分け入り、澄んだ水面に毛鉤を投じると、ヤマメや鱒がそれを咥えようかどうか逡巡しながら近寄って来ます。それを待ち受けるときの期待と興奮は、煩わしい世事をすっかり忘れさせてくれます。この愉しみだけは決して忘れぬよう、これからも時間を作って渓谷に赴こうと思います。

(第7回赤井泰博氏からの紹介)

第9回 (2020年3月9日)

火原 彰秀氏
(北高42期)

第8回の錦織功政氏(北高39期/昭和63年卒)からの紹介です。

錦織功政氏よりバトンを受けました火原彰秀です。錦織氏には、松江から東京に出てすぐの時期、東京のBusyさんに目を回している自分に、高校の先輩として優しく接して頂きました。今でも大変心強い先輩です。錦織氏の軽快なお話の次にやりにくくはあるのですが、高校・大学がらみのお話を考えました。

私は松江北高理数科を卒業後、25年間の学生・大学教員生活を東京で過ごしました。2016年途中から東北大学に移り、仙台生活も5年目に入ろうとしています。大学生の頃からずっと化学や科学計測の研究をしています。

2017年3月に、北高時代に生物を習った泉雄二郎校長先生(当時)とお目にかかる機会があり、その御縁でその年10月の理数科関東研修にて理数科2年生40名弱にお話をする機会を頂きました。いい機会なので、少し自分を振り返りつつ、今の高校生・大学生に期待することを考えてみました。

私が松江北高を卒業した1991年3月は、まだバブル経済が終わっておりませんでした。社会が右肩上がりに拡張する空気を吸って高校生までを過ごしたと思います。情報環境としては、インターネット以前ですので、ある「情報環境中心軸」が存在する中で生活していた気がします。今思えば、楽観的・モノカルチャーな雰囲気で育ったのだと思います。

これに対して、現在高校を卒業する皆さん、生まれてからずっと、経済的には大きな膨張のない安定した環境のなかで生きていて、我々とは違う空気を吸って生きているのだと思います。情報技術の発展が当たり前で、多種多様な溢れんばかりの情報のなかで生活しています。意見は分かれるとこ思いますが、ある視点から見ると、安定した・マルチカルチャーな雰囲気、Developed Countryとしての日本の中で育った世代と言えるかと思います。

このような環境変化にあわせて、社会基盤としての教育モデルにも修正が必要だと思いますが、この意識を広く共有することには大変な困難が伴うように思います。「大学秋入学・ギャップターム導入」などへの、教育界内外からの大きな反発は記憶に新しいところです。各学校・大学で多様な取り組みがなされていますが、現状では一人一人の生徒・学生(とその保護者)が、新時代に目を開いて学びに努めなければならない状況であると感じています。ある意味悲観的なお話ですが、目を開いて見回せばチャンスは昔より広がっている、というお話でもあるかと思います。

さて、理数科関東研修での講演ですが、自分の研究・キャリア・感じていることを交え、これから大学・社会に進む生徒さんに向けたメッセージとして、「理系の人生 ~大学教員あるいは個人の雑感~」というタイトルでお話しました。大学で学んでほしいことの第一は、教養を広める布石としての教養科目、専門性を高めて最前線に飛び出す準備としての専門科目などの「リテラシー」です。また、思慮深さと、協働・自律的活動・ツール・リソースの有効活用などを求められる、調査研究・ワークショップ型講義に代表される「コンピテンシー」関連の勉強をして欲しいことの一つです。これらの「能力」とともに、「環境選択」「自己管理」もキャリア上大事になることをお話ししました。これらのこと、「プロ・サッカー選手と理系研究者／技術者の類似性」に触れながら説明したところ、生徒たちから一定の理解が得られたと思います。とりわけ「パフォーマンス=能力xコンディション」であることは、印象的な概念だったようです。高校生が聞いたことのないお話をしようと意図した通り、感想文からは多くの新鮮な驚きが読み取れました。時代は常に動いていますので、各自の学びやキャリアの中の「変わるべきでないもの」と「変わるべきもの」を考えるきっかけになったのではよいな、と思います。

お堅い話になってしまいました。次のリレーメッセージは、理数科同期の吉田尚史氏にお願いしました。吉田氏は昔から同調圧力に影響されない自由な雰囲気を身にまとっていました。現在でもこの雰囲気を保っている貴重な友人だと思っています。ゆるいお話が頂けるのではないかと期待しています。

第10回 (2020年4月9日)

吉田 尚史氏
(北高42期)



第9回の火原彰秀氏(北高42期/平成3年卒)からのご紹介です。

同級生の火原くんからご指名を受けました吉田尚史です。ミャンマーのヤンゴン、その後東京にて、この文章を綴っています。暮らした土地の違いに注目して、病いと文化、そして人の死にまつわる事柄について、生活者の視点で書いてみることにします。

ふたつ前の錦織さんと同様、国家公務員として在外公館(大使館)勤務をこの3年半ほどさせて頂いておりました。任地はふたつあって、最初はアフリカの島国マダガスカル、そして転勤となって、東南アジアの上座部仏教国ミャンマーへと移動しました。

最初の任地では、中世ヨーロッパにおいて「黒死病」として恐れられたペストが毎年のように発生していました。例年であれば、外国人がペストに罹ることはまずないので、恐れる必要はありません。貧困とこの病いは無関係ではなく、衛生状態の悪い地区で患者が多く発生していました。ペスト菌は、菌をもつネズミを噛んだノミを介して人へと感染します。腺ペストというリンパ節(腺)が腫れるタイプでは、普段の生活において人から人に菌はうつることは稀です。

しかし私の生活した2017-2018年シーズンは違いました。「肺」ペストという、ペスト菌が肺まで達するタイプの患者が、人口が集中する首都アンタナナリボで発生しました。首都には日本人も集中して住んでいます(とはいっても全部で60-70名程度)。肺ペストは、飛沫を介して人から人へと感染します。ペストが原因で死んだ人はペスト菌を含んでおり新たな感染を引き起こす可能性があるため、行政は家族から死体を引き離し持ち



去ろうとしました。このことで住民との対立が起こって問題となりました。マダガスカル人にとって、死体は大切な「先祖」であり、単なる物質ではないためです。

他方、ミャンマーで驚いたのは、ミャンマー人は「お墓を持たない」という話を聞いた時でした。率直に言って、衝撃を受けました。ヤンゴンでは、市内にある公立の火葬場で死体を焼いて灰にします。それで終わりです。その場で灰を廻棄すると言うのです。日本人の感覚からすると共感するのは難しいのではないかでしょうか。本当かどうかと疑問に思い、もう一人のミャンマー人に事実関係を確認してみました。答えは同じでした。ただし多数派である上座部仏教徒ではないイスラム教徒、キリスト教徒、そして中華系の人びとはお墓を持つということでした。

これは一体何故なのかと考えてみました。上座部仏教の大変な考え方のひとつに「輪廻転生」があります。死者の魂はこの世で何度も生まれ変わるという思想です。ミャンマー人は、善行を行い「徳」を積むことを良しとします。寄付行為をすることが生活に染み込んでいます。その背後には、より良い来世を得るという思想が横たわっているようです。お墓の話題に戻れば、死者の魂は次の人生に向かうので、墓は必要ないとなるのでしょうか。ただし、同じ上座部仏教国である近隣国カンボジアでは、パゴダ(お寺)の敷地内に先祖の墓を設けます。この差を不思議に思いました。機会があればより深く検証してみたい点です。

最後になりますが、北高卒業後を簡単に振り返りつつ、文章を閉じたいと思います。医学部へ進学した後、一貫して(精神)医療を生業としてきました。早いもので約20年が経ちました。ただし私の関心はちょっと普通の医療者とは違っているかもしれません。医療者として仕事をしながら、医療そのものを文化として相対的にみるというものだからです。新年度からは、在外での経験を含めた学びを踏まえて、新たな職場で真摯に教育・研究・臨床活動に取り組みたいと考えています。

20代リレー投稿 Vol.1

68期卒業生 中西葉奈さん

はじめまして。中西葉奈と申します。

松江北高校には2013年に入学し、1年間の留学の後2017年の春に卒業しました。現在は秋田県に所在する国際教養大学の4年生です。いよいよ来年から社会人の仲間入りということで、来年度より東京で働く予定となっておりますので、東京双松会の皆様と直接お会いできる機会がありますことを楽しみにしております。大学卒業前に学生時代を振り返る良い機会をいただきました。せっかくなので、高校での留学の経験や大学でどのようなことを考え、活動していたのかを少しお話しさせていただきたいと思います。

高校入学してから学校の勉強についていけず休みがちだったのですが、自分の価値を偏差値以外でも測ってもらえる場所はないのかと考えていた時にアメリカの高校を舞台にした映画に出会いました。一人ひとりの個性が活かされている様子を見て、海外には自分で輝ける場所があるかもしれないと思ったことを覚えています。さらに同時期に出会った、北高出身で当時Googleで働かれていた先輩に言われた、「Googleの検索エンジンで日本語と英語で検索するのでは得られる情報量と見る世界の広さが全く違う」という言葉で高校1年次にアメリカ留学を決意し、高校2年の夏に留学のための試験に合格しました。派遣先はテキサス州クラークスピル。地名を聞いてもよくわからないけれど、映画で見たような最先端の教育環境で学べる、英語が話せるようになると期待に胸を膨らませて飛行機に飛び乗ったのは昨日のことのようです。

派遣先の地域や学校は私が想像していた「アメリカ」とは全く違いました。テキサス州の中でもとても貧しく、主要な産業もないために、ほとんどの住民が生活保護で日々暮らしている地域です。住民のほとんどは黒人とメキシコから移住したヒスパニック系なので、スペイン語が飛び交い、なりの強い英語は全く聞き取れない。学校に行っても授業崩壊。英語の話せない私がなぜかクラスで成績が一番になる不思議な現象が起きたほどです。

そんな留学先で自分のあたり前や常識が尽く覆される経験をしました。学校に行って自分の納得いく職につくのがあたり前な私と、学校に行って仕事につくよりも生活保護に頼る方が安定した暮らしをするのがあたり前な同級生。それまで正解は一つだと教えられてきた私にとっては衝撃的でした。今となってはあたり前



な話ですが私にとっての正解と彼らにとっての正解は違って、どれも正しいことを学んでから、ひとつの物事に対して様々な価値観や意見を知り、検討した上で自分の意見を持てる人間になりたいと思うようになりました。

留学は自分なりに成長のできた1年間だったものの、それでも同時期にアメリカ各地に派遣された日本人の交換留学生がSNSに載せる煌びやかな写真を見て、悔しくなり、留学を応援してくれた両親や北高の先生に申し訳なさもありました。大学ではこの1年間を取り返すために、誰よりも濃い4年間を過ごすと決め、ひたすら勉強に打ち込める全寮制で、全て英語で授業が行われる、アメリカの大学のカリキュラムを採用した国際教養大学に進学をしました。

大学では一つの社会問題に対して複数の国や地域の視点から考える、国際関係学を極めようと、ワシントンDCの大学に留学したり、日本とアメリカの政府機関で授業の合間に働いたり。学問外では興味のあるものは全てやってみようと、TEDxの立ち上げ、40か国地域から集まる学生寮の寮長、英語キャンプ運営、国際学生会議の運営など様々なことを経験させていただきました。大学生活に悔いはありません。駆け抜けられたと思います。

きっと高校留学の1年間での様々な気づきや思い、悔しさがあったからこそ今の自分は挑戦することに貪欲になっていて、自分の意見や意思を持って行動できるようになったと思っています。そんなきっかけを与えてくれた北高の先輩やそれ全力で支えてくださった当時の北高の先生方には感謝しています。私も来年から社会人。近い将来そんな北高に恩返しのできる人間になれるよう、精進してまいります。

校歌

さんみやくうかびて (松江高・松江北高等学校校歌)

さわやかに ♩ = 100

土岐 善磨 作詞
高田 三郎 作曲

さんみやくうかびてはんとうみどりにさ
ざなみかがいやくみづのみやこよ
しんりのひかりをもとめゆくとき
ちせーいのそらはたかくひろくあ
おげばたーだしこもふじ

一、
郷土の歴史を深くもたたへて
川風すがしく渡す大橋
千鳥の城あと街はさかえて
希望も新たかくて常に
知性的空は高くひろく
仰けば正し出雲富士

二、
健康ひとしくいそしみはげみて
世界の人たる胸をひらきて
友情かわらず進むべし
こそれわれら若く強く
松江北高ここにあり

あさひたださす(赤山健児の歌)

西村房太郎 作詞

岩佐万次郎 作曲

あーさひ たださす そう しょう の
てんらい むーねに ひかりあ り
なーみに くだくる みかづき の
かーげに こゆうの しんをみ る
てんちの せいを 一 みに しみて
せいきを の 一ぶる いちひやくね ん

一、

朝霞直刺す双松の 天霜胸に光あり
浪に碎くる三日月の 影に古雄の真をみる
天地の精を身にしめて 正氣を舒ぶる毫百年

二、

蘿煙草むる柳子の下 月に嘯く夕あり
氷雪鎖す丘の上 北斗に吟ずる晨あり

三、

嗚呼剛健と質実と 心の楷に執り持てば
悪魔の征矢も身にたたず 高く率ぐる我旗の
雲光迷路の闇を射て 理想の郷をてらすなり

四、

稜威輝く日の本の 国の礎さし固め
東洋平和を保つべさ 使命を負へる我等なり
責務は重く身は輕じ 起てや赤山健男兒

【編集後記】

コロナに始まりコロナと共に生活し、瞬く間に1年が過ぎました。緊急事態宣言発出で、故郷松江に帰ることすら叶わなかつた寂しい新年ですね。縁あって東京双松会の事務局のお手伝いも数年になりました。まさか、ここにきて記念すべき2020年の総会が中止になるとは、誰ひとり予測をしていなかつたと思います。

本誌の編集に携わりながら、この1年を振り返りますところ、昨年の今頃はギリギリ新年会を行うことが出来ました。その直後から恒例の「観桜会」について関係者と何度も調整の連絡を繰り返した結果、ギリギリで中止の決断をした事が遠い昔の様にも思います。その後も予定していた東京双松会の全てのイベントを中止せざるを得ない状況に準備をしていた関係者と無力感だけを共有していたと思います。せめてもの皆様との繋がりにと、亀の歩みでHPを更新しています。

個人的には東京都COVID19対応指定医療機関の臨床現場でまだまだ終わりの見えない日々を過ごしています。そのため、事務局の仕事がままならない状況でしたが、若手会員がお手伝いをしてくださることになり、暗闇の先に光を見出した思いです。なかなか活発な動きも出来ず会員の皆様に対して申し訳なく思いますが、今後も、東京双松会の活動に少しでもお心を寄せて頂ければ幸いです。

なお、事務局として総会が開催できない代わりに、何か皆様に喜んで頂けることができないかと考え、本年は会報を「特別号(保存版)」として例年より内容を充実させ一定の費用をかけて作成しました。そこで大変心苦しいのですが、会員の皆様におかれましては、年会費の2,000円に加え、ご賛同いただけましたら金額はいくらでも構いませんので寄付金をお願いできなくどうか。是非ともお力を貸しいただきますようお願い申し上げます。

事務局：糸川 孝一 嵐峨崎 泰子

【役員一覧】

(改定: 平成30年10月13日)

会長	井原 勝美(S44)
副会長	毛利 信二(S51)
監事	宮城由美子(S53)、 梅谷 仁(S53)
顧問	石倉 義朗(S30)、 芦田 昭充(S37)、 中村 康一(S40)
事務局長	糸川 孝一(S55)
総会担当	大岩 篤郎(S42)、 高橋 正美(S44)、 中島 良夫(S44) 富岡 透(S47)、 橋本 啓司(S47)、 浅野千賀子(S62)
会計担当	矢田 修治(S46)
H P担当	嵯峨崎泰子(S59)
会報担当	羽田 昭彦(S51)
行事担当	高根 譲康(S55)

【発 行】

東京双松会事務局（中央印刷事務器株式会社内）
TEL: 03-3265-4858 FAX: 03-3265-4859
URL:<https://tksoshou.qwc.jp/>